第 53 号
（発行所）
真宗大谷派
松岡山 廣讃寺
中村区城屋敷町3-30
TEL(052)411-5301
FAX(052)411-5341
携帯 090-1568-4623
E-mail:kousan-temple
@trad.ocn.ne.jp

四月十五日 吉崎御坊参詣

秋田宗和

五月三十日、名古屋別院奉仕研修に参加した。当日は、真宗宗歌斉唱に始まり、同朋奉讃をお勤めし、名古屋別院輪番挨拶のあと、講義「仏教は現実の生活とどこで結びつくのか」を聴講した。

昼食の後、本堂参拝と清掃奉仕、班別座談会、全体での質疑応答、恩徳讃斉唱で閉会というスケジュール。思えば、名古屋別院には五・六歳のころ、祖父に連れられお参りして以来である。その時、境内の西側にサーカス小屋があり、初めてサーカスを見た。境内でところてんやみたらし、わたがし、ゼンマイ仕掛けのおもちゃなどを買ってもらうのが楽しみで、

「宗和！行くか？」

「うん」

と二つ返事でついて行ったものである。

午前の講義は東日本大震災について、中央公論に掲載された高村薫氏の記事を題材に講義をされた。「縁起」と「信心」の言葉が特に印象深く共感した。

午後の座談会では仏教と現実の結びつきについて参加者から、各お手次寺にまつわる話が紹介されたり、個人の経歴から仏縁をいただくに至った紹介などがあった。

自身でも、体調を崩し外科治療を余儀なくされた時、交通事故に遭いそうになった時など、ヒヤッとした時、思わず「なまんだぶ」とつぶやいたことがある。そんな時が無意識に仏教の精神と現実が一致した時ではないか、という気がする。仏教について、これまで深く考えたこともなかったが、今回のテーマについて改めて考えると、少しずつ真宗の教えを聞くにつれ、そんな気がする。所詮この世は人と人との関係、人が創り出した文明の利器による世界である。それらが渾然一体となって不確定な世を形成しているのが現代であり、現実だと思う。これからも不確定な世にあって、お互い先達の遺訓を守り、安穏に過ごせることを願うのは小心者過ぎるだろうか。

仏説阿弥陀経に出てくる仏弟子

伊藤和美

「賓頭盧頗羅堕」

十二番目に書いてある仏弟子は「おびんづる様」の愛称で呼ばれています。

おびんずる様の像は各地にあり、お参りをする人も多い。自分の体の悪いところを撫でると治るといわれ、おびんずる様もピカピカに光っています。このお弟子さまに関しては諸説ありますが、その一つを紹介します。

この方はコーサンビーという国の国師様でした。しかし生活には恵まれず貧乏に悩まされていました。つつましい生活の中、ちょっとしたことに大声でわめきだす妻、何でも欲しがる娘に手を焼いていました。そんな状況でお釈迦様に出会いました。そしてお釈迦様に、静かな世界（浄土）があることを示され、出家し、弟子になりました。

弟子になってからは修行に励み、神通力を身につけ、諸国の王様に説法するようになりました。しかし、しだいに自惚れて、神通力を誇るために大きな石を足にはさみ王舎城の上を飛びました。それを目にした人々はビックリ仰天しました。その事件はお釈迦様の耳に入りました。お釈迦様は戒めました。そして、まだまだ悟りの道は遠いということで、もっともっと修行をし、長い長い間、人々に救われる道を説いていくように言われました。

その謂れから、今でもマリシという山に住み続けて、その使命を果たしているといわれています。涅槃に入ることなく、いつまでも人々に仏道を歩むことを勧めてみえます。福田第一（人々に幸せをもたらす）と言われています。

龍潭寺　丈六の仏（寺西税　撮影）

第三回ご命日のつどいから

M・M

名駅近くの願生寺で開かれた。講師は二十組の誠願寺住職の中谷隆志師であった。供養と、人間の生死観の二つのテーマで資料をあげて法話が進められた。

供養は、『悼む人』という小説から引用された。法事の時に十歳くらいの孫が祖父に

「なぜ、坊さんがお経をあげるの？先祖の供養って何？」

と、質問されて困ってしまう。そんな場面に出あったら皆さんはどうこたえますか？私もこんなことを急に言われると返答に困る。

中谷師は、親鸞聖人のいう供養とは、先祖供養ではないということを指摘され、小説の中で「亡くなった人を忘れない」ことも供養につながってくるのではないか、亡き人をしのびつつ如来の御教えを信じ、今を生かされている自分、存在に感謝をする会こそが法事であると諭された。

生死観は以前、ＮＨＫで放送された番組を例に出された。インドのベナレス（ヒンズー教の聖地）での火葬場の様子が映され、僧侶瀬戸内寂聴氏と、写真家藤原新也氏の対談形式で番組は作られていた。火葬されていく場面から瀬戸内寂聴氏は「美しい！美しい！新しい生命の誕生」と感動され、因果応報の輪廻思想によって生まれ変わるのだと強調された。一方、藤原新也氏は、骨と灰をほうきで無造作に河へ掃き帰って行く人を見て「気が楽になった」と答えた、という。

きっと、世の無常観を感じ悟られたのだと、中谷師はこれに共感したとのこと。しかし、瀬戸内氏、藤原氏、二人の会話はなかなか、かみ合わなかったようです。

私自身は、両方の考え方になっていることに気付かされた。

行事予定

八月

八日(水)二時　常任委員会

十一日(土)七時半　同朋委員会・例会（役員は七時）

十九日(日)二時　学習会

二十八日(火)十時　二十八日講・女人講

九月

八日(土)七時半　同朋会（役員は七時）

十六日(日)八時　庭そうじ（昼おとき後、解散）

十九日(水)二時～四時　学習会

二十二日(祝)十時　秋季彼岸会
説教　廣瀬純史師
廣讃寺講総会
おかみそり

二十三日(日)
二十四日(月)
二十五日(火)
三時　彼岸お勤め
住職説教

二十八日(金)十時　二十八日講総会